

草庵仏教

第229号
(発行日)

2009年7月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《開法会ご案内》

○〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○聖典共学会――毎月6日。

午後7時より。

*8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

仏心大悲のすくい

如來の大慈大悲の心は不思議な功德があつて、凡夫の心に浸透し、心の深部に届いて、しかも離れなくなるのである。

ような根も種もない罪深い身であるのに不思議にも信心が起こつた、この信心は積尊の大悲心のゆえであると讃仰し感謝している。

仏の大悲心は、邪見と憍慢

で固まつている私の心に浸透して、私たちの心の一番奥にまで流れ込んで私の心と一つになりたもう。聖人は、お作りになつた「真心徹到するひとは、金剛心なりければ三品の懺悔するひととひとしと宗師はのたまえり」という

ご和讃の「徹到」と言う言葉に註を施され「とほりいたる。髓に到り徹る」と左訓されている。真心(まごころ)が髓

にいたりとおるというのは、仏のまごころが私たちの心の中、枢にまで入り込んでくださるといふことではなからうか。

「仏心大悲は「髓に徹りたもう」ことは、『安心決定鈔』

にも詳しく説かれていゝ。「仏心といふは、大慈悲心は、大慈大悲心はわれらを愍念したまうこ

と骨髓にとおりて、そみつきたまえり。たとへば、火のすみ(炭)に、おこりつきたるがごとし。はなたとすると、はなるべからず。撰取の心光、われらをてらして、身より髓にとおる」と述べられている。まことに

仏心大悲は凡心にそみつき、凡心を撰取して離れ給わないう。これが撰取不捨の利益といふ真宗の救いにほかならな

またこのことを存覚上人は「正覚いまだなりたまわざりしいにしえ、法蔵比丘として難行苦行・積功累徳したまひしとき、未来の衆生を浄土に往生すべきたねをば、ことごとく成就したまいき。そのことわりをききて、一念解了の心おこれば、仏心と凡心とまつたくひとつになるなり」と仰せられ、仏心と凡心が一つになるといわれている。どうして仏心と凡心が一体

《盂蘭盆会法要》

8月10日(月)

午後2時始まり

如來様が法蔵比丘となつて、私たちが救おうとして難行苦行して徳を積み、私たちが浄土に生まれる種をことごとく私たちに代わつて仕上げてくださいました、というその大悲の思し召しを「一念解了」する時、すなわち「ああ、悪業煩惱の塊である私のために、それほどまでに阿弥陀様はご苦労くださつて私を助けようとしてくれるのか」と、広大な大慈大悲のお心に気がつく時、大悲の真心が私の髓に徹つて、仏心が私の心(凡心)とは離れがなくなるのである。実に不思議という他はない。

ということとは裏から言えば、仏教の深い道理や理論をどれほど理解して記憶して

正信偈に学ぶ問答

(十七)

普放無量無辺光

無碍無对光炎王

清浄歓喜智慧光

不断難思無称光

超日月光照塵刹

(書き下し文)

普く、無量・無辺光、無碍・無对・光炎王、清浄・歓喜・智慧光、不断・難思・無称光、超日月光を放つて、塵刹を照らす。

の罪を除きはらはんがためなり。このゆゑに清浄光と申すと、非常に具体的にその徳を述べておられます」

G 「法蔵菩薩、貪欲のころなくして得たまへるひかりなり、とはどういう意味ですか」

D 「仏説無量寿経には、阿弥陀仏はもと法蔵菩薩でました時に、一切衆生を救いたいと願ひ、その願ひを四十八通りの本願として表し、そしてその本願を実現するために永遠かけて菩薩の行を修せられたのであります。そのご修行は、貪欲の無い心で修行をされた結果、得られたお徳が清浄光というお徳だと仰せられるのですね」

G 「一切の衆生を仏になさるがために、ご修行くださったのですね。どうしてそんなご修行が必要なのですか」

D 「それは、私たちの煩惱が深く、濁悪の心を離れることができないために、いつまでも流転して清らかな仏になることができない。生まれては死に、死んでは生まれるといふ流転の苦しみを出ることができない。そういう私たちのすがたを如来法蔵様は知りたもうて、こういう衆生を助けねばならないと発願されたのです。そして、救うて仏になさなくてはご自身も仏の座にはつかないとまで誓われ、この誓いを実現するために、私たちに代わつて菩薩行を修行されたのです」

G 「私たちがあつてから苦しみと罪濁の中から出ることができないのを見られて、そういう私たちが苦と罪の状況から助けようとされてご修行されたのですね」

D 「ええ、ですからご修行をしなければならなかったのは私たちの救いのない状況を知り給ひ、大悲したもうたがゆえなのです」

G 「貪欲の無い心で修行されたといわれるのは」

D 「それは、私たちが貪欲の心に染まつていて、この心をどうすることも出来ず、貪欲ゆゑに自他ともに苦しんでいるからです」

G 「貪欲に二つあつて、淫貪

も、それは救いへの縁にはなるにしても(救い)にはなりがたいということでもある。仏教の話をどれほど聞いて憶えても、それは心の表面に記憶されているだけ、いわば教養とか知的理解の積み重ねであつて、覚え込んだ仏教の知識や教養は縁が来るとはがれかねないのである。

ということとは、真宗の教えを聞いても、仏心が凡心に流れ込んで離れない限りは、なお退転することがまぬがれない。実際、歳をとつて痴呆症にでもなれば、聞いて憶えた仏教は消えていくのではなからうか。あるいは何か大きな不幸にであつたりすると、仏教どころではなくなつて、仏教を聞く以前に逆戻りしてしまふということもあるのである。

親鸞聖人が比叡山で二十二年も仏教を学んでも、それが身に付かず、どうしても退転してしまい、とうとう比叡山を下りて、法然聖人からお念仏の広大な大悲を聞かせていただいて、初めて仏の大悲心にめざめ、不退転の利益をいただかれたのである。

それゆゑ、聞法は仏の大悲心を聞かねばならない。仏の大悲心は、不可思議にしてよく凡心に浸透して信心となりたもう。浄土の教えは、難しい仏教の道理や理論を知的に理解して助かる道ではなくて『安楽集』に

「ただ浄土の一門のみありて、情をもつて憐ひて趣入すべし」

と教示されているように、(大悲の情)をいただいで往生の道に入らせていただく教えである。

しかも如来の大悲心はたんなる(ななさけ)ではなくて、如来のさとり智慧が内実となつている慈悲心なるゆゑに、凡心におもむき入つて凡心と一つになり、ついによく迷いの凡心を転じて悟りの智慧になしたもう徳があるといわれている。

であれば、お念仏を称えつ「我が名を称えよ」の大悲の思し召しを聞きつけていくところに、仏の大悲の心は凡心に届き、信心として凡心に成就したまうのである。

(了)

と財食といわれるのですね」
D 「ええ、淫食とは性愛へのむさぼりであり、財食とはお金に対するむさぼりのことです」

G 「要するに女（男）が欲しい、お金が欲しい、それが淫食・財食なのです」

D 「そうです。実際、私たちが何を熱望しているのかを深く反省してみれば、このことは否定できません。十九世紀のインドの偉大な聖者であるラーマクリシュナが（人間を迷わすものは女と金である）と繰り返し説教しています、そうなんでしょうね」
G 「こういう欲求が人の中で燃えているのです」

D 「ええ、そうだと感じます。ですからこの世の道徳は、要するにこの欲求に制限を付けて、さらに法律や罰則によって、この欲求を押さえつけることによって、社会の安定をはかろうとしているのだと思います」

G 「盗むな、殺すな、姦淫するな、ウソをつくなというよな、どの社会にもある道徳は、こうした欲望から行われる悪をおさえるためでしょうね。そうすると私たち凡夫の生活の根にあるのは性愛への

欲求とお金への欲求というわけですね」

D 「ええ、そう思います。この貪欲をもとにした生活は浅ましく恥ずべき生活であると仏陀は知らしてくださるのです。そして過度の欲求を離れた少欲知足の生活こそ望ましいのだと仏教では説かれています」

G 「しかし、今日の私たちは、現在の生活を浅ましいとか、おぼろしいとか、悲しいという感覚はなくなり、現在の生活を当たりまえにし、何も悪いとは思えず、今の生活を肯定しているように思います」

D 「そうですね。私たちは今の生活を別に浅ましいとか痛ましいとか感じてません。しかし仏様の目から見られる私たちの生活は淫欲と財欲が根になって、その満足を求めている生活であり、それゆえ苦悩と邪悪が絶えないと見えておられ、貪欲を離れた清浄な仏にしてやりたいと願われたのが阿弥陀仏であります」

G 「法蔵菩薩がご修行くださったのは、私たちの貪欲の罪を除き、清浄の徳を完成してやりたいとの願いでもってご

修行されたのです」

D 「ええ、そのことをよろづの有情の汚穢不浄を除かんための御ひかりなり。姪欲・財欲の罪を除きはらはんがためなり。」
ともうされるのです」

G 「私たちを仏になしたもうというのには淫欲、財欲の罪を除き、浄化して清らかな智慧と慈悲の仏にしてやりたいとお心からですね、私は淫欲・財欲の（罪）をさほど感じませんが」

D 「この欲望は人間の心の中から表れてくるというよりは、人間の身体の本質にまでもなっている欲求であるように私は感じます。心の中を探るまでもなく、我が身そのものにすでに罪が表れているのではありませんか」

G 「貪欲の罪はすでに身体として露わになっているのです」

D 「ええ、罪の身とか穢身とか罪体とかいいますね。あれは実際そうですね」

G 「なぜ罪の身のですか」
D 「たとえば淫食が形を取ったのが身体ではないでしょうか。この身は性愛に応じている身であり、性愛がむしる頭

在化したものが身体ですね。いわば性の体であって、たんなる置物のような静物ではありません。この体から性欲が起るとも言えますが、性欲が形を取ったものがオスとメスになっている体だいえないでしょうか」

G 「なるほど、では財食についてはどうですか」

D 「財食とはお金に対する欲求ですが、これは食わんが為の欲求であることは自明のことです。食うていくためにまづお金が必要で、しかも今日一日だけ食うていけばよいのではなくて、明日も明後日も一年も二年も、何十年先の生活まで食う心配をして、お金をほしがります。それは何故かといえば、食わんがためです」

G 「いつまでも食わんがためにお金が欲しくなりますね」
D 「ええ、食わんがために財への貪りが起こりますが、しかし、食わねばならない体に生まれたから、食うて生き延びたいという欲望が起こるのでしよう。この身体は食わねばならない、食いたい食いたいという欲求の塊です。食いたい、食うて生き延びたいと

いう本能的な欲求があります。その欲求が身体から起こるとも言えますが逆に、生きたい生き延びたい、食いたいという生存欲が形を取って頭在化したのが肉体であるともいえるのではないのでしょうか」

G 「生き延びたい、食いたいという欲望が形を取ったのが肉体であるということは、生きものの共通の姿だといえますね」

D 「そう思います。こうした生と性への欲求が生きもの基本となつていきますから、人間だけではなく、生きとし生けるものが、この罪の身を抱えているといわれて、そういう一切衆生を清浄な仏にしたという広大な願いを起さされたのが阿弥陀仏でありました」

G 「そうすると仏になると、もう肉の身は取らないのです」

D 「ええ、そういわれています。智慧と慈悲を体とした身が仏の身と言われていて、それは肉体の身ではなくて、法の身、真理の身であるとお聞かせいただいています」

信心夜話

太字が松並さんの言葉。

*

○世間の人は、思う様にならぬならぬと、愚痴をこぼしている。こんな者に、思う様になれば五欲は深まるばかり。お阿弥陀様はそんな願いは聞いては下さらぬ。念仏にはまって生活すれば、させて頂くと、人生は思う様になる。思う様にならぬ事があっても、お慈悲に帰ると消えてしまう。親が子に、そんな映画見てはならぬと止めると、子供は不足に思うが、見せて悪いから。子が親の心に帰れば、子が思う様にならぬは、子供を思う親のお慈悲である。良薬は口にながい。

(人生生活を自分の思うようにしたいよりなのが凡夫。思い通りになれば幸せ、ならねば不幸せと決めつけている。凡夫は、あまり人生生活が思うようになると、己の欲求にはまりこんであぶない。有頂天になって大きな失敗をしたりする。思うようにならぬから、慎重にもなり、欲もセーブされてくる。そうはいっても思うようにならぬと、つい愚痴が出てしまう。《なんでこんな目にあわねばならないのか》と。し

様の御慈悲にあうと愚痴がどこかえ消えていく。自分の欲求をかなえるための人生でなく、お念仏をいただく人生と知れば、思い通りにならないことも弥陀の導きと受けとられるのではないか)

○老人曰く「私は今度の一大事の後生は間違いない、お浄土まいりは」と。それは、貴方が思うのなら何にもならぬ。阿弥陀様が《この南無阿弥陀仏であなたの往生は間違いない》と信じておられる。その影があなたの心にとどいて念仏となる。

「信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり」と。南無阿弥陀仏

(自分の往生は間違いないと、自分が自分に言い聞かせているのなら、それは自分で思い込んでいただけ。自分で決めて、自分の往生は間違いないといっても、「本当だろうか」という疑いが出ると、ゆらいでしまう。《疑いなく汝を助ける》という阿弥陀仏のまことの心が私の心に届いて信心となつてくだされば、《必ず助ける》の仏の仰せがそのままお助け間違いないとなる。不思議なことである。信心は仏の大悲の願心が凡心に届いて信心となり、助けると仰せくださる仏の本願に疑いが無くなる)

《住職雑感》

近年の日本仏教の現状を見聞きして、身近に痛感する事は、先祖供養をする人が減少しつつあることは間違いない。実際、私の若い頃に比べると、葬式のあと三回忌以後の法要をする人は少なくなつてきていて、月命日のお参りもぐんと少なくなつていて。この傾向は今後ますます進むであろう。

それは先祖供養の意味が不透明で、先祖供養を積極的に行わなければならぬ理由が分からなくなつたからであろう。ただ、家代々の習俗とか慣習として、あるいは親戚づきあいとして、あるいは先祖供養をしないとバチがあるから、などで行っている場合が多いのである。だから都会生活で、習俗の伝統が弱まり、親戚づきあいが少なくなると、先祖供養に力が入らなくなるとの当然だといえる。そうするとお寺との関わりは必然的に葬儀が中心となる。葬儀儀礼は太古の昔からなされているのでこれが無くなることはないであろう。また、先祖供養の意識が乏しくなるのと平行して《この寺の檀家》という寺への帰属意識も乏しくなるので、いきおい檀家制度は崩れつつあるといつて過言ではない。そうなる、今後の日本の仏教はどうなるのだろうか。台湾とか韓国などの仏教寺院のように信徒と信徒の属する寺という形へとだんだん移行するかもしれない。

では人は寺に何を期待するのか。それは三つほどになるであろう。一つには葬儀をして貰う。二つには現世利益を祈る場所として、三つには、これは仏教寺院の一番の存在意味であるが、人生そのものの問題に救いを見出す場所としてのお寺である。これは、人間は何のために生きていくのか、死と死後の不安とか、自らの罪をどうするかというような、いわば生の意味、死と死後の不安、そして自らの罪業と孤独の問題、そういう人生の根本問題に込める場所として寺が求められるのである。ただ、日本の寺の数は他国に比べて非常に多いが、先祖供養意識が薄くなると寺の数は減少していくと思う。無論、先祖供養の意識は日本人から決して無くならないであろうが。また、現世の除災招福の祈りの場としての寺はいつの時代も盛んだから、祈願所としての寺も存続していくだろう。また人間の根本問題に答える寺としての意義は、人に自覚されているかどうかにかかわらず宗教心のない人はなく、人生の根本問題を抱えていない人はないから、この問題に答えて得る教法を伝えるかぎり寺は存続していくに違いない。真宗寺院は除災招福に関わらない

《休会のお知らせ》

八月十二日(念仏会)は休みます

(八月二十二日は例年通りありません)

のであるから、死者儀礼と仏教そのものの伝達とがメインになる。死者儀礼の執行は難しくないが、宗教の根本問題に十分答え得るかどうか、これは容易ではない。住職の努力が直接問われる点である。寺が仏教本来の問題に答えていくなら、数は多くないかも知れないが、寺は存続していくと思う。

(了)